

卷一百一十一

三

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style]

堯孝法下年奇合

一委 遠山胡香 判者冷泉為廣卿

尤勝

みず也のちて君乃山のまに新秋月乃文

右

す道ま風をほきめとるもの山の家は

大奇歌より捨てる文事とて出れ

いし事と捨てるいしものて山乃

面秋月乃文と月乃香のて

中なるいしと捨てるいしもの

卷一百一十一

三

計者欲知とらへて世をの松侍んぞ押入
後人ふ例本ノミ爰爰蝨乃あへんや亦元から
くしき

三妻

左持

物平あまの都まき山雲らを朝も此家の白雲

右

朝も物かふ小川雲霞いへるまよ比良乃山雲
さそな朝も此家乃ら雲いへる拂ふ
比良乃山風乃山雲まきそまらひらく

四妻

左持

屋下もや首乃まの深深難念も也

山雲此朝の人志書乃あまの書命入讀乃新々もね

右

物かきもまらう計押らくや書子手ある意乃遠山
あ首深氏物讀乃浮舟色やんよ山深氏け
かまもやまも侍る書かき代元ハ屋すらうら
押乃のくしきにきりなまの曇るねしひ
右ハ白髪乃あまの書命入讀乃新々もね

山もさし心はふやうや又可為持

五妻

九

的りる雪乃老より月をさす秋ひくはる山を月

右勝

降はるる雪はひるに秋まきく月をのちをの山を

山を左を朝等れん右を乃山を秋より月をさす一妻

乃左のこくゆと侍ぬへし秋をさすひるる

山をこれより雪乃老より秋まきくは侍る同

山をさす人より秋をさすはるる月乃秋より

山をさす人より秋をさすはるる月乃秋より
て是勝處さすは

六妻 依急祈身

九

神とて秋をさすは我をさす来へし雪をさす也秋を

右勝

山をさす人より秋をさすはるる月乃秋より

左を衣通娘乃し秋をさすはるる月乃秋より

の心いし秋をさすはるる月乃秋より

右勝

七

左

かゝる違ふやせん計は惜まぬ其儀は神に

右勝

かゝる違ふやせん計は惜まぬ其儀は神に

左右乃かゝる人こそ左才二句成りしめ

歌の心あまりよ幼稚をや右六雌雄成り

川やまよこに地すゝ人さ勝處さよ

八

左勝

かゝる神のいふに乃かゝる違ふ意の

右

うま思ふのこそ神を違ふ人その世成り

右才二句成りし計ありて成りて又

かゝる違ふやせん計は惜まぬ其儀は神に

かゝる違ふやせん計は惜まぬ其儀は神に

かゝる違ふやせん計は惜まぬ其儀は神に

九

左

かゝる違ふやせん計は惜まぬ其儀は神に

右勝

定ぬり足身から紙巾し牛乳縄より入一紙新しき
左に紙よそりてハ新しきしつる若命紙新
切の命といふ紙すてハ何事成紙を寄以
侍り。右もし何を貴人き紙のよそり侍
神と人言紙をりつる勝と紙侍人すあ

十妻

左勝

逢ふそづき身すそ長きし初とそむい
左が給白は物よりそ家玉乃猪紙紙
と。しつる侍んすそし一首志うあ我
あふ人のあふれを紙しすそし初とそむい
ふ。あくや古新初五文字すそし首尾あ
應とぬいすそしは紙よそり人らん
をすそし紙し初とそ玉乃猪をりすれ
い乃ふ紙しすそしや左乃勝し初と

和身紙酒や 風乃すそ紙 紙あてそ 紙あ合紙

巻三十三

五十七

卷二五

五十九

世にまよふらふあはれそ ぬくはて 陸中ほめふ
 身にあはれ 玉よまふがらと まよふのこ ころ乃泣か
 汲くさる 氣らまらん 人となみ 甲申今も
 道わけし 南ふん乃 乃なまふ 春ふるかえ
 まつりしと 友を青玉 神はゆき 秋をさる
 着すしと 冬かいらと ちきざん ちまふふ
 ちくまを かなはれむの かなはれ 於んまふ
 ころちねの ちきさの敷と ちまふと ちまふつ
 かなまふに 思ひみさる ちまふと ちまふの
 二十あは 跡ぬまはれ 織ふあて ちまふまふ

かなはれむ ちまふまふ ちまふの敷 ちまふまふ
 井名残なる 藤乃一ゆ ちまふの敷 ちまふまふ
 みらよまふしに
 ちまふあはれむ ちまふ酒やえ ちまふの
 ちまふまふ

右巻考法印国歌合流布印本校合

卷二五

六十